ディオニュシオスのトゥキュディデス文体批評

柳　沼　重　剛

ここでハリカルナッソスのディオニュシオス（以下 DH と略記する）によるトゥキュディデス（以下 Th と略記する）論を取り上げる理由は二つある．私は Th の文の読みにくさは故意のもので，彼独自の文章術の所産であると信じているのだが，その文章術が当時の弁論術（修辞学）とどう関係していたのかを，弁論術の多くの著作があり，ことに『トゥキュディデスについて』（*De Thucydide.* 以下 *De Thuc* と記す）という，古代唯一の Th についての詳論を残し，しかもみずからも歴史家でもあった DH から聞いておこう，というのがその一。その二は，しかるに DH の Th 評は見当はずれだという意見と，基本的にはあれでよいのだという意見とが有力な学者の間に平行して唱えられているので[1]，自分の目と耳で確かめておきたいということである。

1

De Thuc は全体で 55 章，Usener-Radermacher による Teubner 版で 94 頁という大きさで，そのうち前半 20 章が歴史書としての Th 評，後半 35 章が文体の批評となっている。従って我々がとくに参照すべきはこの後半 35 章だが，ここでの DH の議論もかなり多岐にわたっているので，ここではとくに Th の文章構成法について論じている箇所だけを取り上げることにする[2]。

第 24 章を見ると，DH は Th の用語の特徴と文法上の特異点を列挙した後，こう言っている，A「挿入文が多く，長く，なかなか文の結末に至らない」，B「文が曲りくねり，構文が入り組んでいて，それを解きほぐすのは容易ではない。」この 2 項について実例を挙げて説明してくれと，アンマイオスという人物から要請されたのに対して，DH が書いた返事『アンマイオス宛第二書簡』（*Ep. II Amm.* と略記）というのが残っていて，それによると，DH は上の A の例としては Th I 2.2 と 9.2 を挙げ，B に関しては Th II 42.4（有名なペリクレスの葬送演説の一節）と I 138.3（テミストクレスの人物評）を

挙げている。本稿では，Aの2例のうちI 9.2については私自身本誌第6号11-14頁で扱ったので，II 42.4を，Bについてはテミストクレスの方を見ることにする。そこでまずTh I 2.2は次のような文である（文中の縦線や記号・番号は筆者による）。

[a] *τῆς γὰρ ἐμπορίας οὐκ οὔσης①, οὐδὲ ἐπιμιγνύντες② ἀδεῶς ἀλλήλοις οὔτε κατὰ γῆν οὔτε διὰ θαλάσσης, νεμόμενοί③ τε τὰ αὑτῶν ἕκαστοι ὅσον ἀποζῆν* [b] *καὶ περιουσίαν χρημάτων οὐκ ἔχοντες④, οὔτε γῆν φυτεύοντες⑤, ἄδηλον ὂν⑥ πότε③ τις ἐπελθὼν καὶ ἅμ' ἀτειχίστων ὄντων ἄλλος ἀφαιρέσεται④. τῆς τε ἀναγκαίου τροφῆς πανταχοῦ ἂν ὁμοίως ἐπικρατήσειν οἰόμενοι⑦* [c] *οὐ χαλεπῶς ἀνίσταντο.*

DHの考えでは，この文の[a]を直接[c]につなげ，間にある[b]は，[a][c]とのつながりが明らかでなく，文意をたどろうとしてもたどりにくいので省くべし，ということになっている（*Ep. II Amm.* 15）。つまり[b]は挿入文で，これは無い方がよいというわけだが，その根拠は何だろうか．

註3）と4）によって *πότε* を *ὁπότε* に改め，*ἀφαιρέσεται* の後のセミコロンをコンマにすると，①から⑦まで番号をつけた分詞は，①は絶対的属格，他はすべて分詞構文をなすものだ，ということがはっきり見えて来る。そうすると，この①—⑦の分詞のうち[b]に属するのは④⑤⑥⑦だが，①—③は[c]にかかり④—⑦はそうでない，という根拠は形の上にはないことが分ろう（⑥については註4a）で触れる）。従って[b]を挿入文と見る根拠は意味にしかない。その意味は次の通りである——

[a]① 交易が行われていない。
② 陸上海上を問わず安心して往来ができない。
③ めいめい自分の生命をつなぐだけのものを所有している．
[b]④ 余剰物資を持っていない。
⑤ (果)樹を植えない。
⑥ いつよそ者が襲って来て，城壁のない土地を掠奪するか分らない，
⑦ 必要な糧はどこでも手に入ると思った，
[c] あっさり移住した。

これで分るように，[c]は主節である。これでもやはり[a]に属する①—③のみが主節にかかって他はかからない，と言える根拠はないことが分ろう（[c]にかからない唯一の分詞構文は⑥で，これは「分らないからあっさり移住した」ではなく，「分らないから果樹も植えず」とつながる[4a)]。そこで，意味から言

っても [b] が挿入文だと考えない方がすっきりする。7個もの分詞構文を連ねられては，確かに主節が待遠しくなる。しかし不明晰にはならない。

これに対して，DH が挙げているもう一つの例，Th I 9.2 は，かつて私が示した通り，このAの例として適切であるばかりでなく，次のB，「入り組んだ文」の例としてもふさわしい。

そこでB「入り組んだ文」の例——Th I 138.3.（文中の記号は筆者による）——

[a] *ἦν γὰρ ὁ Θεμιστοκλῆς βεβαιότατα δὴ φύσεως ἰσχὺν δηλώσας καὶ διαφερόντως τι ἐς αὐτὸ μᾶλλον ἕτερον ἄξιος θαυμάσαι.* [b] *οἰκείᾳ γὰρ ξυνέσει, καὶ οὔτε προμαθὼν ἐς αὐτὴν οὐθὲν οὔτ' ἐπιμαθὼν τῶν τε παραχρῆμα δὶ ἐλαχίστης βουλῆς κράτιστος γνώμων καὶ τῶν μελλόντων ἐπὶ πλεῖστον τοῦ γενησομένου ἄριστος εἰκαστής.* [c] *καὶ ἃ μὲν μετὰ χεῖρας ἔχοι, καὶ ἐξηγήσασθαι οἷός τε*[5]*. ὧν δε ἄπειρος εἴη, κρῖναι ἱκανῶς οὐκ ἀπήλλακτο.* [d] *τό τε ἄμεινον ἢ χεῖρον ἐν τῷ ἀφάνει ἔτι προέωρα.* [e] *καὶ τὸ ξύμπαν εἰπεῖν, φύσεως μὲν δυνάμει, μελέτης δὲ βραχύτητι κράτιστος δὴ οὗτος αὐτοσχεδιάζειν τὰ δέοντα ἐγένετο.*

それぞれの長さはまちまちながら，Th としては短い5個の文の集合で，これなら「入り組ん」でいると予告されても，別に覚悟を決めることなくとりかかることができる。

[a] 冒頭の *ἦν* はどう見ても文末の *ἄξιος θαυμάσαι* にかかって，「というのもテミストクレスは驚くに値した」。中間は「驚くに値した」理由を示す分詞構文 *δηλώσας*…と，「驚くに値した」程度を示す副詞 *διαφερόντως* を含む句で，少しも「入り組ん」でいない。それよりはむしろ，指示代名詞 *αὐτό* が何を指しているのかの方が分りにくい[6]。

[b] は[a]の文の敷衍的説明である。手段の与格 *οἰκείᾳ ξυνέσει* により「自分の洞察力によって」と言い，次に分詞構文 *οὔτε προμαθὼν*…*οὔτ' ἐπιμαθὼν*（「何かを前以て学んでその洞察力を得たのでもなく，後に経験から学んでそれを身につけたのでもなく」）によってそれをさらに説明した後に，この文の主要部が来る。そしてこの主要部は，二つのほとんど完全に相似形をなす句が *τε*…*καί* で結ばれたもの（「ほとんど」と言ったのは，2番目の句の中の副詞句の語数が前のより1語多いから），しいて言えば，*τῶν παραχρῆμα* の代りに *τῶν παρόντων* とでもして，次の *τῶν μελλόντων* に対応させてくれた方がなおさらすっきりしただろう——つまりこの文も「入り組ん」でなどいない。もし読

者をつまずかせるものがあるとすれば，その一は γνώμων，これは Classen-Steup の註が教えているように，「判断者」の意味で使われた例が稀だからである。その二は，これは読者をつまずかせるというよりは言葉の無駄なのだが，τῶν μελλόντων…ἄριστος εἰκαστής「将来のことどもの最善の予言者」という句に，ἐπὶ πλεῖστον τοῦ γενομένου「最も遠い将来に至るまで」をあてがったこと。上に述べたように，なるべく完全に相似形をなす句を作るために，前の句の中の δὶ ἐλαχίστης βουλῆς（「少し考えただけで」）に対応する句が必要になった結果だろうが，無駄は無駄である。しかし反面，Th といえども弁論術を無視したわけではないこと，彼ほど言葉を節約した人はいないというのは確かだが，その彼も時によってはこのように，無駄を顧みずに文の形を整える努力をすることがあった，ということをはっきり示している。

［c］ 二つの関係節 ἃ μὲν…ὧν δέ にそれぞれ主節がつづいて，形は誠に整然としている——「みずから手を下したことについては言葉で説明することもできたし，みずから手を下していないことについても十分に判断することを妨げられはしなかった。」

［d］ これも至極明瞭.「不確かなことについてすら，可・不可の別をこよなく予見した。」

［e］ まず「総じて」τὸ ξύμπαν εἰπεῖν と言った後，二つの相似的で対照的な副詞句 φύσεως μὲν δυνάμει「天性の力によって」と μελέτης δὲ βραχύτητι「準備の短かさによって」（→「少し準備をしただけで」）を置き，これが共に以下の主節（「彼はその場その場の必要にみごとに応ずることができた」）にかかっていて，これも整然としている。

以上[a]—[e]を通じて，Th I 138.3 には少しも入り組んだ構文がない。

それなら割愛したペリクレスの演説（II 42.4）はどうかと言うと，これも上に掲げたAの文例（I 2.2）に似て，多くの分詞構文が堆積して主節にかかるという構造が一目瞭然で，入り組んだ文の例として不適当である。この文を読みにくくするものがあるとすれば，それは指示代名詞が何を指しているのかがすぐには分らないということの方である。

かくて，「挿入文が多い」「文が入り組んでいる」例として DH が挙げた Th の四つの文のうち三つまでが，例として適当ではないと判断されたわけである。

しかし，「長い挿入文が多い」にしても「構文が入り組んでいる」にしても，古来 DH 以外の大勢の人々によって認められていることであり，今日では誰でも知っていることになっていることである。従って，DH がこう言ったこと

自体は少しも異とするに足らないのだが，例がおかしい，ということで，これは奇妙な話である．前提が間違っているのに結論が正しいという論理的なおかしさもさることながら，DH は我々の目には入り組んでもいない文を見て入り組んでいると思っているわけで，こうなったら考え方は二つしかない。つまり，DH の言葉の感覚がおかしいが，あるいは「入り組んでいる」という形容詞（*πολύπλοκος*）の意味のとり方が，DH と我々では違っているかである。しかしここで大事なことは，DH は，古代の，ギリシア人だった，ということで，これはフィロロギアの進歩には関係がない。ギリシア語について，古代のギリシア人は知らなかったが我々は知っている，ということは山ほどあるだろうが，それでも我々の方が彼らよりギリシア語をよく知っていることには決してならない。英米人と対等に英文法を研究する，あるいは教えることはできても，英米人と同じように英語を読み書き聞き話すことはできないのと同じである。だから，DH に向って「あなたのギリシア語の感覚はおかしい」と言うのは痛快ではあろうが，そう簡単に決めつけることはできない[7]。

2

そこでさらに DH の言葉を聞くことにする。今度は *De Thuc* 29-33, Teubner 版で5頁半にまたがる長い箇所である。論じられているのは Th III 82 である。この巻の70以来ケルキュラの内乱の様を叙述していた Th は，81 でそれを終え，82-3 ではケルキュラから離れて，およそ内乱というもののもたらす醜悪さ悲惨さ救いの無さを論じている。全巻の中でも有名な箇所だが，かの Gomme をして，「ここは非常に重要な箇所で，Th が極めて慎重に言葉を選びながら書いていることは間違いないが，それにしてもむずかしい」と言わしめた箇所であり，そこでというわけで，全く異例なことに，この箇所に限り，Gomme は註のほかに全訳を付している[8]。DH は Th の以上の箇所のうち，82.2 までは明晰で簡潔で力強いと認めるが，82.3 以下の文はよじれていてついて行きにくく，ここまで来ると誤用と言ってもよい言い廻しで構成されていると言い，彼の批判はほとんど毎行に及ぶ。

[a] *De Thuc* 29 (p. 374, 1ff. U-R)＝Th III 82.3: *ἐστασίαζέν τε οὖν τὰ τῶν πόλεων①, καὶ τὰ ἐφυστερίζοντά② που ἐπιπύστει τῶν προγενομένων πολὺ ἐπέφερε τὴν ὑπερβολὴν τοῦ καινοῦσθαι τὰς διανοίας τῶν τ' ἐπιχειρήσεων περιτεχνήσει καὶ τῶν τιμωριῶν ἀτοπίᾳ③.* (82.4) *καὶ τὴν εἰωθυῖαν τῶν ὀνομάτων ἀξίωσιν ἐς τὰ*

*ἔργα ἀντήλλαξαν τῇ δικαιώσει*④.（①②③④は筆者による）

まず①について DH は言う，*τὰ τῶν πόλεων*「諸国のことども」→「諸国の状況」などというのは要らざる periphrasis で，これは *αἱ πόλεις*「諸国」と言えばすむ。これは確かにその通りと思え，ことに *ἐστασίαζεν*「内乱が起った」「騒乱状態になった」の主語としては *αἱ πόλεις* の方が自然だと思える．ただし periphrasis という DH の用語はやはり気になる。Periphrasis というのは弁論術の用語で，同じことを別の（普通はより多くの）語を用いて言うことである[9]。今の場合，DH は Th が *αἱ πόλεις* と言えばすむところをわざわざ *τὰ τῶν πόλεων* と言ったと解したわけだが，Th 自身も両者が同じ意味を表すと心得た上で *τὰ τῶν πόλεων* を選んだのか，と問わねばならない。

② *καὶ τὰ ἐφυστερίζοντά που* などというのは意味がとれないから *αἱ δ' ὑστεροῦσαι πόλεις* とすべしと DH は言う。「おくれた諸国」すなわち「後から内乱が生じた国々」を *τὰ ἐφυστερίζοντα* と言うのは確かに奇怪で，DH の方が問題なく分りやすい。しかしこれは，①で *τὰ τῶν πόλεων* という言い方をしたことと関連しているので，もし①で *τὰ τῶν πόλεων* に固執するならば，ここでも（*τὰ ἐφυστερίζοντα* は奇怪すぎるとしても）DH の提案には従えないことになる。

③と④は DH はひとつながりに述べている。③は *ἐπέφερε* 以下 *ἀτοπίᾳ* まで，④はそれ以下を指しているのだが，DH の言わんとするところは，要するに抽象名詞，とくに *-σις* という動詞から派生した抽象名詞（verbals）や *-ία* の使いすぎ，ということである。確かにここではそれが目立ち，とくに④などはほとんど *-σις* と *-ία* ばかりで構成されていて，これは極端である。DH は，③については，こういう構文は耳障りだと言い，④については「解きほぐしがたいもつれ合い」だと言い，こういうのは詩，それ以上にディテュランボス向きだと言っている。③と④はほぼ同じ性質の構文で，その一方については「耳障り」だと言い，もう一方については「詩」に向いていると言っているのは矛盾している．耳障りなものが詩に向いている，と言っていることになるからである。しかしそう四角ばってとらえずに，「詩，いやむしろディテュランボス」という DH の言い方を見るならば，ここで彼が頭に思い描いているのは詩一般ではなくてディテュランボスだということになり，要するに大げさに気取った詩という意味だととればよいことになる[10]。最後に残るのは，DH が④について言った「解きほぐしがたいもつれ合い」で，これは先ほどの Th のテミストクレス評の文を DH が「入り組んだ文」と言ったのと同じく，我々には「も

つれ合」っては見えない。総じて，DH は抽象名詞，とくに verbals を用いることが嫌いであるらしいことがよく分る評言で，確かにここではそれが常軌を逸しているとしても，これでは Th の文は好きにはなれないだろうと思うと同時に，これまで見た DH の評言の中で「入り組んでいる」「もつれ合っている」「periphrasis である」などという語に出会ったのは（verbals ばかりではないけれども）多かれ少なかれ抽象的，とくに名詞的表現のある箇所だったことに気がつく。

間をとばして *De Thus* 31 の末尾に移る．

［b］ *De Thuc* 31 (p. 377, 19ff. U.R)＝Th III 82.7 の3番目の文：

καὶ ὅρκοι εἴ που ἄρα ἐγίγνοντο[11] *συναλλαγῆς, ἐν τῷ αὐτίκα πρὸς τὸ ἄπορον <ἑκατέρῳ> διδόμενοι ἴσχυον, οὐκ ἐχόντων ἄλλοθεν δύναμιν.*

この文は一見簡単そうに見えながら実はそうでないということは，諸家の註や訳を見ると分る。その註や訳をいちいち紹介することはしないが，これほどいろいろの読み方をさせるのは悪文，少くともほめるわけには行かない文であろう。問題は *ἐν τῷ αὐτίκα* をどこへかけて読むかということと，文末の *δύναμιν* を何という意味にとるかということに集約されそうである。私としては，*ἐν τῷ αὐτίκα* の方はその colon の末尾の *ἴσχυον* にかけ，*πρὸς τὸ ἄπορον* を *διδόμενοι* にかけて，「(和の誓約は)（他に）何の打開策もないことにかんがみて，互に交されたがゆえに，その当座のみ物を言(うにとどま)った」ととる。*δύναμιν* の方はもっと面倒で，文脈や前後関係からはそれを決定できない。諸家があてはめた訳語を列挙すると，resources, sources, support, weapon, l'appui, Verstärkung 等々。Classen-Steup の註を見ると，あれも駄目，これも駄目と否定した挙句に，*οὐκ ἐχόντων* 以下は，*πρὸς τὸ ἄπορον ἑαυτῷ διδόμενοι* という句の説明として欄外に書いてあったものが，本文中に紛れ込んだという考え方を披露している。——つまりこの箇所は語義が不透明で，構文が「もつれ合っ」ているのである。

これに対して DH は，この箇所について何と言っているかと言うと，「ここには hyperbaton と periphrasis がある。また *ὅρκοι συναλλαγῆς* とは *ὅρκοι περὶ συναλλαγῆς* のことである」としか言っていない。そしてこのうち，hyperbaton というのは，*ἐν τῷ αὐτίκα* が *ἴσχυον* にかかっているのに，それぞれが遠く離れて，間に文の他の要素が挿まっていることを指している。これはこれでよいのだが，それなら *ὅρκοι* と *συναλλαγῆς* も hyperbaton の関

係にあるはずである[12]。一方 periphrasis の方は何を指して periphrasis と言っているのか分らない。しかし最も分らないのは，この構文は「入り組んで」いるとも「もつれて」いるとも言っていないことである。

[c] *De Thuc* 32 (p. 378, 13ff. U-R)＝Th III 82.7: *ἐν δὲ τῷ παρατυχόντι ὃ φθάσας θαρρῆσαι εἰ ἴδοι ἄφρακτον, ἥδιον διὰ τὴν πίστιν ἐτιμωρεῖτο ἢ ἀπὸ τοῦ προφανοῦς. καὶ ὅτι ἀπάτῃ περιγενόμενος συνέσεως ἀγώνισμα προσελάμβανε. ῥᾷον δ' οἱ πολλοὶ κακοῦργοι ὄντες δεξιοὶ κέκληνται ἢ ἀμαθεῖς ἀγαθοί, καὶ τῷ μὲν αἰσχύνονται, ἐπὶ δὲ τῷ ἀγάλλονται.*

あまり長くなるので，DH のこの文の批判の全部の紹介はやめて，重要だと思える2点だけにとどめる。はじめは *ἥδιον…προφανοῦς* について．この文の構文は明瞭である。「*ἀπὸ τοῦ προπφανοῦς* によりはむしろ *διὰ τὴν πίστιν* に，より好んで報復した」→「明らさまに報復するよりは *διὰ τὴν πίστιν* に報復する方がよいと思っていた。」DH はこれについてもまた periphrasis だと言い，これでは意味が十分に汲み取れないから言葉を補わなければならない，と言っている。——さて，問題は *διὰ τὴν πίστιν* である。*πίστις* は無論「信頼」で，*ὅρκοι διδόμενοι*「誓約が交された」仲だというので差当り信頼し安心しているのである。前置詞 *διά* の持つ意味の中で，ここに当てはまりそうなのは1(時間的に)「…の間に」か，2「…のおかげで」か，3「…ゆえに」しかないだろう。このうち1は詩にしか用例がないので，ここでは考慮の外に置くとすれば[13]，残りは2と3である。一方 *τὴν πίστιν* は副詞として *τιμωρεῖτο* にかかっていると同時に，*ἀπὸ τοῦ προφανοῦς* と対照的な意味を表しているはずだろう。そこで，「(明らさまにでなく) 信頼のおかげで報復した」「(明らさまにでなく) 信頼ゆえに報復した」，どちらを取るか。どちらも取れない。しかし，「…のおかげで」という意味があるなら，また「…ゆえに」という意味があるなら，「…の力を借りて」という意味もあるはずで，「…の力を借りて」という意味にとってよいなら「…をいいことに」と訳しても差支えないはずであり，それが許されるなら，「裏切り行為により」とも「信頼にもかかわらず」とも訳せることになる。この最後の結果だけ見ると，前者は *πίστις* には含まれていない意味を勝手に与えたように見え，後者の方は *διά* にない意味を勝手に想像したように見えよう。一般に文を読む時，我々は想像力を働かせながら読んでいるが，Th は，そういう読者の想像力に委ねることによって省くことができる語句は省く，あるいは，読者の想像力を頼りにすれば，ある語に辞書的な

意味以外の（ただしそれとどこかで連なる）含意を持たせることによって，真正直な書き方をするよりは簡潔な表現をすることができる，そう見た場合にはさっさとそうしてしまう。これが「表現の節約」と呼ばれて有名なの文体上の特徴であり，上の *διὰ τὴν πίστιν* もその一例になろう。——DH がこの文には言葉を補わなければ意味が分らないと言ったのも，恐らくこれを指してのことだろう。——これに対して，DH がここでも periphrasis ということを言っているのは，やはり分らない。先ほど言ったように，DH の言う periphrasis とは（「入り組んでいる」というのと同様）verbals を中心とする抽象名詞を使うことに対する反感を表す評語だとすれば，ここではその periphrasis も *διὰ τὴν πίστιν* のことを指していることになる。

他は全部省いて，*ῥᾷον δ' οἱ πολλοί* 以下の文についての DH の発言だけを聞く．すらすらと読める文である。「多くの者は，善人で馬鹿だと呼ばれるよりは，悪人で利口だと呼ばれたがった。そして前者たることを恥じ，後者たることを威張った。」訳し方はもっと工夫できるが，とにかくこういう意味は一読即解で分る。ところが DH は，この文は簡潔なのはよいが意味が分らないと言っている。「馬鹿で善人とはどういう人間のことか」，「善人とは悪人の反対ならば，悪人でない者がなぜ馬鹿なのか」，「馬鹿とは無思慮な人間のことならば，どうしてそんな人間が善人なのか」等々，まだつづくのだが，DH はここでわざと分らないふりをしているのだろうかと疑わしくなる[14]。

そして最後に（(*De Thuc* 33 のはじめ)，以上紹介した [a] [b] [c] および私が割愛した箇所すべてについての評言として，「以上が不明晰にしてかつ入り組んだ文体の特徴である）と言っている。

3

De Thuc 34-48 は Th の中の演説についての論考である．34 のはじめに，この論考を 2 部に分け，はじめに演説の内容，次にその文体を扱うと DH は言っているが，実際にはそうはっきりと分けてはおらず，しかも内容の論考の方に重心があって文体に触れること甚だ少い。

DH がここで賞讃している演説と批判している演説とを表にすると次の通りである。

A　賞讃しているもの：

1. Th II 71 以下のプラタイア攻防戦での，プラタイア使節とスパルタ王アルキダモスの演説，内容・文体いずれの面から見ても非の打ち所

なしと賞讃した後に，その演説全文を引用している。

2. Th I 140-4 のペリクレスの演説。

3. Th VI 9-14, 20-3, VII 11-5, 77. これらはすべてアテナイの悲劇の将軍ニキアスのもの。VII 11-5 は演説ではなく，シシリーでの苦戦を訴えて援軍の派遣を要請した手紙。

4. Th III 53-9 の，プラタイア陥落に際してプラタイア人代表がスパルタ人に対して行なった演説。DH はこれこそ演説家・歴史家がこぞって模倣すべき手本と激賞している。

DH は，ある文をほめる時は，非難する時のようにいちいち特定の文，特定の句や語を例示していない。

B 批判しているもの：

1. Th V 85-113 の有名な「メロス談判」。駄目な内容を駄目な文体で書いたものだと決めつけているが，「あのアテナイ人がこんなことを言うはずがない」という思い入れが根底にあって，DH が力説すればするほど（この批判は，引用をも含めてだが，Teubner 版で9頁にも及んでいる）彼の理解力の限界を見る思いがする[15]。

2. Th II 58-64. ペリクレス最後の演説中 61.1, 61.3, 63 を除く箇所，すなわち大半．この批判も上のメロス談判の批判同様，内容がペリクレスにふさわしくないというに尽きていて，これも DH の理解力の限界を示す結果になっている[16]。

3. Th VI 76-80 の，シュラクサイ代表ヘルモクラテスのカマリナ市民に対する演説．全体としては効果を挙げていてよいが，次の箇所にはほめるわけには行かない要素があるとしているのが，76.2, 76.4, 78.1, 78.3。そして DH の批判はここではじめて文体に集中しているので，以下にそれを見ようと思う。

[a] Th VI 76.2 (*De Thuc* 48, p. 406, 15 ff. U-R): *νῦν γὰρ εἰς τὴν Σικελίαν προφάσει μέν, ἣ πυνθάνεσθε, διανοίᾳ δέ, ἣν πάντες ὑπονοοῦμεν. καί μοι δοκοῦσιν οὐ Λεοντίνους βούλεσθαι κατοικίσαι, ἀλλ' ἡμᾶς μᾶλλον ἐξοικίσαι.*

DH がこの文をよくないと言うのは，*κατοικίσαι*, *ἐξοικίσαι* という，弁論術で paronomasia と呼ばれている語呂合せのゆえであり，これはわざとらしいばかりで，語り手の気持を伝えていないと評している。Paronomasia 自体は咎めるべきものではなく，むしろ弁論家はこれを効果的に使おうとしている

し，Th 自身もしばしば利用している。問題は，すべての技巧がそうであるように，用いる時と所を誤ると嫌味にしかならないということで，DH はこの paronomasia は正にそうだと考えたのである。そして paronomasia とは要するに語呂合せだから，効果的であり得ると同時に，つねに「軽み」の余韻を残す．そこで DH が，この軽みが，ヘルモクラテスの演説全体を蔽っている痛切な気分にそぐわない，と感じたかどうか私は知らない。

しかし DH は，この箇所に関してはもっと重要な点を難ずべきだった。冒頭の νῦν についてである。Th のテクストではここには ἥκουσι「彼らは来た」と動詞がある。それが DH の引用文の中では脱落して，代りに νῦν が入っている。DH 自身ここを νῦν と読んだかどうか決定的には分らないのだが，*De Thuc* のすぐれた写本ではそうなっているので，今日の刊本ではすべて νῦν となっている。もし DH も νῦν と読んでいたとすると，彼は動詞のない文を読んでいたことになり，それが copula がもあるならともかく，「彼らは来た」という意味を持っている動詞の場合，仮に Th の「表現の節約」を考慮に入れても異常である。確かにこの動詞がなくても意味が全くとれないことはないが，それこそ DH の嫌いな雲のかかったような文になり，paronomasia よりははるかに重要な問題である。この文を Th のテクスト通りに読めば，勢の強い名文だと私は思う．

[b] Th VI 76.4 (*De Thuc* 48, p. 406, 20ff. U-R)：*καὶ οὐ περὶ τῆς ἐλευθερίας ἄρα οὔτε οἷδε τῶν Ἑλλήνων οὔτε οἱ Ἕλληνες τῆς ἑαυτῶν τῷ Μήδῳ ἀντέστησαν, περὶ δὲ τοῦ, οἵ μὲν σφίσιν ἀλλὰ μὴ ἐκείνῳ καταδουλώσεως, οἱ δ' ἐπὶ δεσπότου μεταβολῇ οὐκ ἀξυνετωτέρου, κακοξυνετωτέρου δέ.*

これも[a]と同じ理由，つまり paronomasia ゆえによくないと DH は言う。しかしこの文は構文の込み入り方の方がはるかに目立っているはずである。

まず，この文以前に，アテナイがデロス同盟を組織したのは，彼らが言うごとくペルシアに対抗するためではなく，それを口実にギリシア諸国をおのれに隷属させるのがねらいだった，と語られていることを念頭において上の文の *οὐ περὶ τῆς ἐλευθερίας…ἀντέστησαν* を見ると，「自由のために立ち上ったのではない」と読めて一息つける。すると *οὔτε…οὔτε* が目に入り，前の *οὔτε* には *οἷδε*，後の *οὔτε* には *οἱ Ἕλληνες* があることに気がつけば，*οἱ Ἕλληνες* とは「ギリシア諸国人」で，それなら*οἷδε* はアテナイ人だと分る。また *οἱ Ἕλληνες* の後の *τῆς ἑαυτῶν*「彼ら自身の *τῆς*」，この女性単数属格

で指されるものは，はじめの *περὶ τῆς ἐλευθερίας* の「自由」しかないことも分る。そして，*ἑαυτῶν* の前に *τῆς* を置いたのだから，前の *τῶν Ἑλλήνων* という同じ複数属格の前にも *τῆς* を置くはずだと予想されるのに，Th がそれを省いたのは例の「表現の節約」，そこで *τῶν Ἑλλήνων* は「ギリシア諸国の自由」だと分って，全文の意味が納得が行く——「彼らがギリシア人の自由のために戦ったのでもなく，ギリシア諸国が自分たちの自由のために戦ったのでもなく」。

後半はもっと面倒である[17]。まずはじめの *περὶ δὲ τοῦ* から。これを，この引用文の頭の *οὐ περὶ τῆς ἐλευθερίας* と関連づけて，*ἀλλὰ περὶ*…にすればなおよかろうと考えるのは公式的すぎるかも知れないが，もっと重要なのは次の *τοῦ* である。これは Th のテクストにはない（従って次のコンマも Th のテクストにはない）。ここに *τοῦ* があるのは，先の引用文 [a] で *ἥκουσι* の代りに *νῦν* を入れていた写本であり，従って今日の *De Thuc* のすべての刊本でここに *τοῦ* がある。もし Th のテクストのように *τοῦ* もなければコンマもないと——*περί* はもちろん前置詞で，その目的語は後の *καταδουλώσεως*，ただし，理屈ではそう分っていても，ここでは *περί* の直後は新しい文の開始を告げるかのように *οἱ μέν* があり，さらにやがて *οἱ δέ* があるために，読む方では大変落着かなくなる。これはやはりかなり異様な語順であろう。そこでそういう落着きの悪さが DH にも感じられて，そのために *τοῦ* を入れて *περί* の目的語となしたのではなかろうか。とにかく「次のことのために」と，ここで言葉の流れを一旦切って，*οἱ μὲν*…*οἱ δέ* と新しい流れを起させる，その考え方は少しもおかしくない。しかし問題は新しく起された文の方に生じる。つまり *καταδουλώσεως* という属格名詞をどうするかということで，これはどうしようもない。*οἱ δέ* の後の *ἐπὶ δεσπότου μεταβολῇ* が，せめて *περὶ δ.μ.* となっていれば（これが普通の書き方，それを敢て *ἐπὶ*… とするのは Th 流）まだしも，*ἐπί*+与格では *καταδουλώσεως* の救いようがない[18]。従って，*περὶ δὲ οἱ μὲν*… という Th のテクストは，いかに奇妙に見えるにしても，*περὶ δὲ τόν, οἱ μὲν*… よりは筋が通っているのである。——先頭に置かれた前置詞 *περί* にはもちろん強調がかかるが，その前置詞の直後に主語が置かれたために，この主語も甚だ目立つことになった。ここまで来る頃には大略次のような構図が見えているだろう。

$$\text{οὐ περὶ τῆς ἐλευθερίας} \left\{ \begin{array}{l} \text{οὔτε οἷδε} \\ \text{οὔτε οἱ Ἕλληνες} \end{array} \right\} \text{ἀντέστησαν,}$$

$$\boxed{\pi\epsilon\rho\grave{\iota}\ \delta\grave{\epsilon}} \left\{ \begin{array}{l} o\grave{\iota}\ \mu\grave{\epsilon}\nu\ \pi\epsilon\rho\grave{\iota}[\delta\grave{\epsilon}]\ \kappa\alpha\tau\alpha\delta o\upsilon\lambda\acute{o}\acute{\omega}\epsilon\omega\varsigma \\ o\grave{\iota}\ \delta\grave{\epsilon}\ \grave{\epsilon}\pi\grave{\iota}\ \delta\epsilon\sigma\pi\acute{o}\tau o\upsilon\ \ \mu\epsilon\tau\alpha\beta o\lambda\hat{\eta} \end{array} \right\} (\grave{\alpha}\nu\tau\acute{\epsilon}\sigma\tau\eta\sigma\alpha\nu)$$

残りは *oἱ μέν* と *καταδουλώσεως* の間の句，それに *μεταβολῇ* 以下だけになる．前者では二つの与格があるが，これらはいずれも *καταδουλώσεως* にかかる。これも Th 独特の語法の一つである。*καταδούλωσις* の派生源は *καταδούλομαι* だが，この二つの与格はこの動詞にかかっていた与格（これが対格でなくて与格であることがすでに Th 流）で，動詞が *-σις* 名詞になっても与格は保存された（普通なら属格—gen. obj.）というわけである。そこで，「彼らはペルシア人ではなくギリシア諸国人の奴隷化のために」となる。——*oἱ δὲ…* の方は *ἐπὶ δεσπότου μεταβολῇ*「主人の首のすげかえのために」であり，その「主人」に対して，DH が嫌った paronomasia をなす二つの比較級の形容詞，「いっそう知慧がないわけではない」「いっそう悪知慧の働く」が添えられた．Th はこの paronomasia を形成するために，わざわざ *κακοξυνετός* という形容詞を作っているので，この paronomasia はかなり意識的のものと見てよい。しかし DH が気にするほど目障りではない。——とにかく，これだけ込み入った文を前にしながら，paronomasia だけを問題にして他は素通りしたというのは，不思議と言うほかない。

［c］（78.1 についての DH の評言は省く）Th VII 78.3 (*De Thuc* 48, p. 407, 15ff. U-R)：① *καὶ εἰ γνώμῃ ἁμάρτοι, τοῖς αὐτοῦ κακοῖς ὀλοφυρθεὶς τάχ' ἂν ἴσως καὶ τοῖς ἐμοῖς ἀγαθοῖς ποτε βουληθείη αὖθις φθονῆσαι.* ② *ἀδύνατον δὲ προεμένῳ καὶ μὴ τοὺς κινδύνους οὐ περὶ τῶν ὀνομάτων, ἀλλὰ περὶ τῶν ἔργων ἐθελήσαντι προσλαβεῖν.* ③ *λόγῳ μὲν γὰρ τὴν ἡμετέραν δύναμιν σώζοι ἄν τις, ἔργῳ δὲ τὴν ἑαυτοῦ σωτηρίαν.*（文中の番号筆者）

さて，この文に関して DH は，こういう文は若い連中が書きそうな下手に凝った文で，いわゆる「なぞなぞ」よりむずかしい，と言い，③に至っては無くもがな，青二才でもこんな文を付け足したりはしないだろうと極言しているが，さて

①に関しては特記すべきことなし。「もし予測がはずれたりすると，おのれの不運を歎くあまり，私の幸運を昔（妬んだことがあったが，＜あの頃の方がよかった＞」）のようにもういっぺん妬んでみたいものだと，多分思うようになるだろう。

②は短いが簡単でない文。文頭の形容詞 ἀδύνατον「不可能な」は ①の文を受けて，「ところがそれは不可能だ」。次に二つの与格の分詞 προεμένῳ と ἐθελήσαντι が，誰にとって「不可能」なのかを示して，「(私を) 見棄てた者」と「自分も引き受けることを欲しない者」。そして何を引き受けることを欲しないかと言えば τοὺς αὐτοὺς κινδύνους「同じ危険を」であり，そこへ οὐ περὶ…ἀλλὰ περὶ… と形容がついて，「名目上ではなく事実上 (同じ)」と言っているのだと知れば終る．込み入ってないとは言えぬ，しかし「なぞなぞよりもむずかしい」文ならほかにあったと思う．

③ この文についての DH の評言は実質上二つのことを言っていて，一つは，この文は付け足しだということ，もう一つは，青二才でもこういう文は書かないだろうし付け足さないだろうということである。彼がそう感じる理由は何だろうか。内容から言えばここは，シュラクサイを代表するヘルモクラテスが，隣国カマリナの市民たちに向って，いずれは諸君も同じ憂き目に逢うことになる，それにしては我らに対する諸君の態度は冷いではないか，という趣旨の言葉を連ねて何とか説得しようと努め，ここにその一応の締めくくりをしている所なので，私には少しも付け足しという感じがしない．そこで文体の方は如何と言うに，もし難じ得る点があるとすれば次の2点，λόγῳ μὲν…ἔργῳ δέ と σώζοι…σωτηρίαν であろう。まず前者についてだが，すぐ前の文②で οὐ περὶ τῶν ὀνομάτων…ἀλλὰ περὶ τῶν ἔργων という，これとそっくりの対照をやったばかりのところへ，また λόγῳ μὲν…ἔργῳ では，互に近すぎてうるさいと DH は感じたのだろうか。しかし畳みかけるということもある。「我らをば見棄て，我らと共に危険を分け合おうともせぬ者には，それは叶うべくもない。しかもその危険たるや，名目上は別々でも事実は同じき危険なのである。名目上は諸君は我らを救うのであるにもせよ，事実は諸君みずからを救うのである。」——他方これらの対照句は当時流行していた考え方，そしてその言い表し方であったので，一種の紋切型になっていたはずで[19]，ヘルモクラテスがこの痛切な訴えをしている演説の中の，しかも互にこれほど近い所で二度も同じ種類の紋切型を使うのはこの場にふさわしくない，と DH は考えたのだろうか[20]。そこへもって来て，σώζοι…σωτηρίαν という，同語反復にすらなる（「救いを救う」）動詞とその目的語（しかもこれらは同根の語）[21]が配置されれば，ここに言葉の遊びを感じ取らないわけには行かなくなって，DH を苛立たせたかも知れない。しかしこれらが「青二才でも書かない」種類のものであるかどうか，私には分らないと言うほかない．

4

以上で，DH が Th の特定の箇所について批判を加えた例のほぼ半ばになる。半ばであってすべてではないから，これだけから何かを言うのは公平を欠くかも知れぬが，ともかく以上を整理してみると次のようになる。

DH の評言	認否*	箇所数	Th 全体として
挿入文が長い	×	1	挿入文が多い
入り組んでいる	×	3	入り組んでいる
言葉が足りぬ	○	1	表現の節約
periphrasis	×	4	periphrasis 多くも少くもない
hyperbaton	○	2	hyperbatan が多い
paronomasia	○	2	paronomasia やや多い
——**	×	5	
Th III 82.7 について	×		
メロス談判	×		
ペリクレス最後の演説	×		

* 左の DH の評言に賛成なら○，反対なら×とした。
** DH は何も述べていないが，文体上の問題のある箇所。

いちいち数を調べるには及ばないが，上の表で ○，すなわち DH の発言に我々も賛同できる箇所は5，それに対して ×，すなわち DH に賛成するわけには行かぬ箇所は 17，となり，要するに大半は × になることを知る。この結果について二，三註釈をつけねばならぬこともあるが，今は別のことを引き合いに出す。それは，*De Thuc* 24 で DH は，Th の文体を生むもとになっている手法(ὄργανα) というのを4項目挙げているのだが，それと上の表との関係，つまり，*De Thuc* 24 の4項目は総論で，上の表は各論に当るので，それをひき比べてみようというわけである。さてその4項目とは，

(1) 詩の語彙を使う
(2) 言い廻し (σχήματα =figura) が多様
(3) 聞く者には耳障りな語順の文が多い
(4) 文の運び (σημασία) が速い

このうち(1)は，これまでの文例では触れられていなかったが，私が割愛した部分にはこの種の発言がある。上で何度が出て来た periphrasis とか hyperba-

ton とか paronomasia とかいうのがこの σχήματα に当るので，(2)もよく問題にされていたことになる。これに対して(3)は上で全く触れられておらず，むしろ註 7）で述べたように，この件は別の箇所で詳細な検証を受けている。(4)は上で見た限りでは1箇所でしか問題にされていない．しかもその1箇所も，明瞭にそう言っているわけではない。そこで，DH は Th の文体に関する総論で挙げた4項目のうち，2項目についてしか各論の中では扱っていないことになる。

この4項目についてはもう一つ言っておくことがある。*De Thuc* の中で DH が Th の文体について最も関心を抱いているらしいのは明晰ということ（実際にはほとんどの場合，Th の文が「明晰でない」という言い方で表れる）だが，そしてこれ自体は正しいのだが，上の4項のうち明晰さに直接関わるのは(4)でしかない（(1)は場合によっては関わる）。他方，この4項のうち(1)—(3)はすべて弁論術(修辞学)の体系の中に確固とした地位を与えられている項目である。つまりこういうことになる。DH は，Th の文の不明晰さを最も気にしているにもかかわらず，総論で彼が挙げた Th の文体形成上の要因は，彼が Th の文を読んだそこから抽き出したのであるよりは，むしろ，((4) を例外として）弁論術の項目中 Th の文に当てはめることができるものを当てはめたと推察される。

もう一つある．上で見た Th の文例の中に，文を明晰ならざるものにさせる要因になると我々は見たが DH は述べていない，というものが二つ（あるいは三つ）ある。その一は，指示代名詞が何を指しているのかがすぐには分りにくいことがあること。その二は，私がかって「アンバランス」という呼び名で呼んだ文体上の特徴[22]（上に見たところでは，相対照する句を，片方は ἐπί で始め片方は περί で始めるというのもその一例)。その三は，「表現の節約」の一部と見ることができることで，表現の節約の結果，語意（文意もだが，直接には語意）が不透明になっていることである．この3点のうちその三は，DH も「文の運びの速さ」という項目の中に含めて考えていたかも知れないし，私が割愛した部分に，1度だけだがそれへの言及がある。しかし，その一，その二は，共に Th の文では非常に目立つことであるにもかかわらず，DH は全く触れていない。これもまた上の推察を補強してくれるだろうと考えられる．DH の関心はあくまでも修辞学の方にあって Th にあったのではない。Th は修辞学研究の材料の一つ以上のものではなかったのである[23]。

前節で紹介した「メロス談判」と「ペリクレス最後の演説」についての DH の発言をここで思い出す。これは文体論ではないが，一瞥の価値はありそうである。——「メロス談判」を DH が憤然として否定するのは，この会談におけるアテナイ人が，自分たちの言っていることは悪だとはっきり知りながら，メロス人に言うことをきけと強要している点で，これはペルシア王がギリシア人に向って言う台詞であり，世界で最もすぐれた法を有するアテナイ人，ペルシアの理不尽な要求に対して，敢然としておのれを捨てて自由のために戦ったアテナイ人，全人類の中で最も高度の文明を生んだアテナイ人が，このような言葉を口にするはずがないし，他方，小さな，そして歴史に何を貢献したというわけでもないメロス人が，このように堂々と物を言うはずがない，という理由による。——また「ペリクレス最後の演説」を DH が批判する理由は，この演説は，開戦2年目にしてすでに戦争の災厄に音をあげたアテナイ人が，この戦争を始めた責任者としてペリクレスに不平と怒りをぶちまけているのを宥めるために行なったものであるのに，Th が描くペリクレスの態度は高飛車で，アテナイ人を叱りつけている。これでは市民たちの怒りに油を注ぐようなもので，ペリクレスほど賢明な人間がそのような愚を犯すはずがなく，彼はむしろへりくだり，聴衆の怒りを鎮めようと努力したはずである云々，というのである．

DH のこの二つの批判に共通しているのは，アテナイ人なりペリクレスなりについて，あらかじめ，一つの，固定観念，それも極めて浅い所で固定された，一つの観念を持っていて，それを Th の描くアテナイ人やペリクレスがそれに反していると抗議していることである。これが，先に私が DH の理解力の限界と言ったものの具体的内容である。ペリクレスの戦死者葬送演説に高々と掲げられていた理想（そこにすらその萠芽はすでに見えるが）が消えて，ただの力の外交に堕落したアテナイがメロスに来たのである。後にシシリー遠征という愚行に市民たちを煽り立てたアルキビアデスが言い放った「我々はもはや自分の意志で支配圏を限定することができないところまで来ている」という思想がここにもある[26]。全人類の中で最も高度の文明を生んだアテナイ人はここにはいないのである。——ペリクレスの演説については，註16)に紹介した Gomme の言葉がすべてを言い尽くしている[25]。

ここまで来れば，Th 研究における DH の価値については，明白に否定的な結論が出たと言ってよいだろう。DH ではなく Th の文体についてならば，W. Schmid と共に，最も的を得た批評をしている Blass[26] が，なぜこの DH

に関しては，我々の Th の文体研究は DH から出発すべきであるなどと言った[27]のかが私には分らない．我々は DH からではなく，Th 自身の文からめいめいの考察を進めるほかないようである。

Th の歴史ではなく，その歴史の文体を考察するというのは一見臍曲りにも思われようが，しかし Steup が，先述の 'Einleitung' (註 2))，S.LXXVIII で，Th の思考法は本質的に hypotaktisch だのに，書いた文はどちらかと言えば parataktisch だと言っているのとか，それと並んで Blass が，前掲書(註 1)) の S. 224 で，いわゆるペリオドスを 'absteigend' なペリオドスと 'aufsteigend' なペリオドスに分類し（大ざっぱに言えば，前者は主節の後に従属節が来るもの，後者はその逆)，このうち後者のみが古代のペリオドスの観念に適合するのだが，Th のペリオドスは主として前者で，これは実質上は parataxis に等しいと言っているのとか，あるいは Denniston が，*The Greek Particlse*[2] (Oxford 1954)，lxxiv で，particle というものは，韻文にせよ散文にせよ，対話者の speech のはじめの部分で最も多く用いられ，同じ speech でもその中間でははじめほど多くはなくなり，アリストテレスのような formal treatises や Th のような歴史書（ではヘロドトスのような歴史書ではどうか）では，使われることが最も少いと言っているが，それならその少い particle を現に Th が使っているのはどういう場面においてであるかとか，まだまだ真面目な考察をするに値する問題がある。

註

1) DH の Th 評を認める（ただし文体論に関してのみ）代表は F. Blass, *Die attische Beredsamkeit* 1 (Leipzig 1988, Nachdr. Hildesheim 1979)。認めない代表は A.W. Gomme, *A Historical Commentary to Thucydides* (Oxford 1945-81)。最も熱烈に DH を賞讃するのは W. Rhys Roberts。ただし *De Thuc* についてではなく，修辞学者としての DH の主著『文章構成法』*De compositione verborum*（以下 *De comp.* と記す）について。彼の *Dionysius of Halicarnassus*: *On Literary Composition* (London 1910, Rep. New York 1976) の至る所にそれが見られる。

2) DH は，Th の文全体に通じる特徴として，雄大・厳粛で感動的だが分りにくいということを言っている。後にも言うように，*De Thuc* の中で DH が一番強調したいのは「分りにくい」ということだろうが，これは古代の批評家すべての一致した意見だったらしい。例えばキケロ『ブルトゥス』7.29，『弁論家』9.30，クィンティリアヌス『弁論術教程』10.1.74 など。ただし Julius Steup は，Classen-Steup の註釈書の 'Einleitung' の中で (S. LXXXIII)，古代の批評家は Th の分りにくさを誇張していると言っている。なお *De Thuc* の現代の註釈書は W. Kendrick Pritchett, *Dionysius of Halicarnassus*: *On Thucydides* (Berkeley & Los Angeles 1975) で，非常に親切に書かれているが，適切な註は意外に少ない。

3) 今日 *Ep. II Amm.* のテクストは Usener-Radermacher の Teubner 版の *Dionysius Halicarnaseus* の Vol. V (Leipzig 1899, Nachdr. Stuttgart 1965) しかないのでそれに従ったが，この *ἄδηλον ὄν πότε* は，最良の写本が *ἀδηλον ον ποτέ* となっていて使えず，その他の写本では *ἀδηλον ὄν ὁπότε* となっていて，これは Th の写本通りである。Th からの引用文は，DH の写本よりは Th の写本の方がつねに正しいとは限らないので厄介だが，ここでは *πότε*（これを生かして *ἄδηλον ὄν* という句も生かすというのは私にはよい読み方とは思えない）に固執するよりは，一音節（しかも，いかにも落ちそうな）を加えて *ὁπότε* にした方がずっと無理なく読めるし，Th のテクストではそうなっているので，*ὁπότε* を採る。

4) ここにセミコロンがあるが，セミコロンがあるということはここで文が切れることを意味する。しかし DH が [b] を挿入文だと言っているのは，彼がここで文を切らずに読んでいるしるしであり，また Th のテクストではコンマになっているので，私もコンマとして読む。

4a) 形の上から，他の分詞がすべて複数主格になっていて，従って主文の動詞 *ἀνίστανται* の主語と同じ意味上の主語を想定させるのに対して，これだけは中性対格で絶対的対格を形成しているからである。

5) このセミコロンも，Th のテクストに従ってコンマとして読む。*Μὲν…δέ* の対照から言ってもその方がすっきりする。

6) Classen-Steup に従って，*αὐτό=τὸ ξυνετὸν εἶναι* ととる。

7) 例えば註 1) に挙げた DH の主著 *De Comp.* 4.26 f. で，彼がヘロドトス『歴史』I 9 のはじめの文を示し，次にその語順を少し変え，単語を二つ三つ入れ替えて，ちょっといじるとこんなに変る，これは Th そっくりだ，と言っているのを見ると，確かに文の滑らかさがなくなったことは分るが，「こんなに変った」というほど変ったかどうかは分らない。これなどはギリシア人以外には本当には分らないだろう。また *De comp.* 22.162 以下 4 頁にわたって，DH は Th I 1.1 の語順を，主として音声面から分析してみせている。このうち，*ξ* の前に *σ* を置くなとか，母音連続 (hiatus) を避けろというのは分るが，*ν* と *τ*，*ν* と *κ* などを隣接させるなというあたりから，実感を以て分るとは言えない。有名な，アクセントのある音節はない音節よりピッチが 5 度高いという説も，この本の 11.58 ff. にはじめて説かれたものだが，これなどはただ承っておく以上のことは無理であろう。

8) Gomme, op. cit. (註 1) 参照)，Vol. II 383-5

9) 詳しくは H. Lausberg, *Handbuch der literarischen Rhetorik* (München 1960), §§ 589-598 参照。

10) ディテュランボスは本来ディオニュソスに捧げる合唱歌で，よく悲劇の起源に関連づけて考えられているが，古典期以後になると，形式は自由（というのは良く言えばで，つまりほとんど無いも同然）でスタイルは誇張に満ちていたという。

11) この *ἐγίγνοντο*（直説法未完了）はおもしろい。Th のテクストでは *γένοιντο*（希求法アオリスト）である。ところが DH は，この文は意味がとりにくいと言って Th の文を書き直してみせるのだが，その中で *ἐγίγνοντο* を *γένοιντο* に改めている。つまり DH が読んだ Th テクストでは *ἐγίγνοντο* となっていたのである。

12) DH は *ὅρκοι* に直接 *συναλλαγῆς* という属格 (gen. obj.) をつなげるのはよくないと言っているわけだが，確かに LSJ の辞書はそういう語法は記載されていない。しかし DH が薦める *περί*＋属格も載っていない。載っているのは不定法を伴う例だけである。

13) しかし Th がここで詩のイディオムを使わなかったという保証はないのだからと，敢てこの1を採れば，これは修辞学で言う metonymia になる。

14) DH の発言も驚くべきだが，それ以上に私が驚いたのは Steup も Gomme もこの箇所には手を焼いているらしいことである。この Th 研究史に名を残す両大家が手こずっている文を，私が簡単に分ったつもりになっているのは，何か大事なことを見落して，それで分ったつもりになっているだけなのではないのかと，未だに疑心暗鬼の状態でいる。Steup は，Krüger の読み方，'die meisten lassen sich aber lieber gewandte Schelme als ungebildete Biedermänner nennen' を採り，それなら *καλεῖσθαι* には分詞は要らぬから *ὄντες* を省けと言う。しかしそれでは，なぜ *κακοῦργοι δέξιοι* を 'gewandte Schelme' と属性的に捉えなければならないのだろうか。彼はさらに，通常はこの *κακοῦργοι ὄντες δέξιοι* を 'wenn sie schelme sind' という意味にとり，後半では *ὄντες* を *κακοῦργοι* あるいは *ἀγαθοί* にかけて読み，その結果何を言おうとしているのか分らない文章になっている，と言い，実質上 DH のに似た考え方になっている。——Gomme は，ここばかりは DH の疑義はもっともだと言った後，Steup の挙げたこの「通常の読み方」に対して，これはわけが分らぬと言い，Steup の *ὄντες* を省く読み方に対しても，これは意味には分るが *ὄντες* を省かなければならぬではないかと言い，それにしても 'a clever rogue' と 'an uneducated *Biedermann*' がなぜ二者択一にならねばならぬのかと問い，ここはいっそのこと，*οἱ πολλοί* の後に *ἢ* を補って 'either clever if they are knaves or fools if they are honest' と解すべきだと結ぶ。しかし，Steup に対して *ὄντες* を省かなければならぬではないかと言った人が，なぜ *ἢ* を補えと簡単に言うのだろうか。それに第一，この 'either…or…' は 'the majorify of men are readily called' という文を受けているわけで，そうすると，悪い奴らは利口と呼ばれ，正直者は馬鹿と呼ばれたがったことになって，これはこれで分りにくいと思う。——私見では，Budé 版の Weil-Romilly のように，*ὄντες* を温存したまま，'Le plupart des hommes aiment mieux être appelés habiles en étant des canailles, qu' être appelés des sots en étant honnêtes'.（下線は筆者）と読む（Steup の言う「通常の読み方」にしても Gomme の提案にしても，なぜ *ὄντες*… という分詞構文を 'wenn' にしたり 'if' とったりしなければならないのだろうか）のが最もおとなしくかつすなおな読み方だと思う。

15)「理解力の限界」については後出第4節で触れる。

16) Gomme, op. cit., Vol. II 181 の，DH のこの発言に対する批判は決定的である。彼は言う，DH は，ペリクレスが自分の信じているような人間だったのかと，みずからに問いもしない。また，この時この場でのアテナイの状況はどうだったのかという考察もしない。そして 'He can only think of set speeches of types suitable to certain typical, and really guite artificial situations—victory, defeat, arguments for war or for peace, or for and against democracy, and so forth: that is how he interpreted Thucydides' words, *ὡς δ' ἂν ἐδόκουν μοι ἕκαστοι περὶ τῶν αἰεὶ παρόντων τὰ δέοντα μάλιστ' εἰπεῖν.*' 以下の考察を進めるに当って，私は Gomme のこの言葉からヒントを得た。——ついでだからもう一つ，Gomme の見事な議論を紹介しておく。DH が *De Thuc* 9 で，Th の III を例に挙げて，彼の歴史記述が年代別でもなく地域別でもなく，夏・冬によって区切るという新しい方法を採ったために，一つの事件が長引いた場合，その事件の記述が夏・冬で区切られ，同じ夏に別の地域で起きた全く別の事件（しかもこれが一つで

はない）もいっしょに記述され，かくて記述がここかと思えばまたあちら式になり，一つの事件の全体像がつかみにくいとこぼしているのに対して，Gomme が，この区切り方のおかげで（ただし残念ながら DH が例示した Th III でなく IV を例証としているが），何が分ることになったかを鮮やかに描いている（彼の *Greek Attitude to Poetry and History* [Sather Classical Lectures 27: Berkeley & Los Angeles 1954], 134-7）。

17) この構文については，Classen-Steup の註の VII の 'Anhang' に詳細な分析がある。

18) 写本の中にはこの τοῦ を τῆς としているものがある（その場合コンマはない）。これだと実質上 Th のテクストと同じことになるが，これは恐らく *De Thuc* の本来のテクスト，すなわち DH が読んだ Th のテクストではなく，むしろ，この写本を写した者が，自分が写している本の τοῦ を見て奇異に思って，καταδουλώσεως に合わせるために τοῦ を女性形に改めたのだろう。

19) Th 自身 λόγος—ἔργον の対照を好んで用いた。正確な数は覚えていないが，少くとも 30 回以上（そしてその大半は演説—従って，これを好んだのが Th 自身なのか，それとも当時これが流行したことを Th が写しているのか，厳密には分らない）使っていることは確かである。J.D. Denniston は，*Greek Prose Style* (Oxford 1952) 13 で，これを Th の 'a craze for logical antithesis' と呼び，Th II 43.3, III 40.1, それに VI 92.3 を例として挙げて，内容より文，形を優先させた（つまり内容から言えば λόγος—ἔργον など用いるべきではない所で用いた）悪しき例だと言っている。

20) 私見では紋切型に 2 種類ある。一つはいつどこで使っても駄目なもの，もう一つは時と所を得れば効果を挙げるもの。今の「名目・実質」は後者だろうと私は思う。

21) 皮肉なことに，DH ここでは何も言っていないが，これは periphrasis である。

22) 本誌第 6 号（1981）所収の拙論「トゥキュディデスの演説の文体について」9-10。

23) それなら弁論術（修辞学）用語である periphrasis を，DH がなぜ用語とはずれた意味で使ったのかは今のところ分らない。

24) 拙著『古代知識人群像』（東京 1974）18 を参照。

25) DH が Th 論で採った方法が，彼が身につけていた修辞学の諸概念を Th の文に当てはめることだったとすると，思い出されることが一つ二つある。それは，例えばテオプラストスに有名な『人さまざま』という著作があって，これはペリパトス学派の性格論の代表的な遺産であるばかりでなく，今読んでもおもしろい作品（森進一訳で岩波文庫にある）だが，その書き方は終始一貫して，「空とぼけとは…することである。そこで空とぼけをする人とは…」，「へつらいとは…である。そこでへつらう者とは…」というようになっている。つまりいくつかの（この本でテオプラストスが挙げているのは 30 種）の性格類型がまず念頭に浮べられ，次にその定義づけが行われ，最後に（そしてこれが主要部とはなるのだが）その具体例が述べられる，という手順が一定しているということ，すなわち，現実の人間との交り合い，あるいは人間を観察することから性格が抽出されるのではなく，先に類型が考えられてその具体例を人間に求めるという態度をとっていることとか，あるいは，これも有名なプルタルコスの『英雄伝』という厖大な伝記集があって，50歳を越えたプルタルコスがあれだけの大著を世に送ることにした動機は，「偉大な人物の性格を明かにする」ことによって，読者の向上心の糧たらしめようとしたことにあり，しかし「人間の行為こそ性格を表す」ものだと信じるがゆえに，いろいろの人

物のいろいろの行為が次々と披露されて『英雄伝』が出来上って行くはずみなのだが，実際に『英雄伝』を読んでみると，プルタルコスは，性格は行為に表れる，というよりは，行為は性格の表れであると考えているのではないかと思えて来る。つまりここでも，テオプラストスの『人さまざま』の場合と同じように，まず，例えば「ためらいがち」という性格をある人物に与え，しかる後にその人物の行為の中から「ためらいがち」の実例を拾い出す，という手続が見られるのである（これについて詳しくは，拙稿「プルタルコスの伝記における性格」（中村・松本・岡編『古代ギリシアの神と人間』<東京 1979>参照)。――他にもまだ例がありそうだが，ヘレニズム以後，このように概念とか規則とか典型とか類型とかいうものが，現実から抽き出されるのではなく，逆にそれらを現実に当てはめて現実を解釈しようとする傾向が目立っている。これを精神の弛緩だとか知性の怠慢だとかと評価まですることは，ここでは避けるが，とにかく目立つという事実だけは指摘しておきたい。

26) Wilhelm Schmid, *Geschichte der griechischen Literatur*, 5 (München 1948), 182 ff.; Blass, op. cit., 203 ff.

27) Blass, op. cit., 208, Anm. 2.